



うそあるべし
全

へ 13
539



天保甲午孟秋鐫

江戶木屑庵著

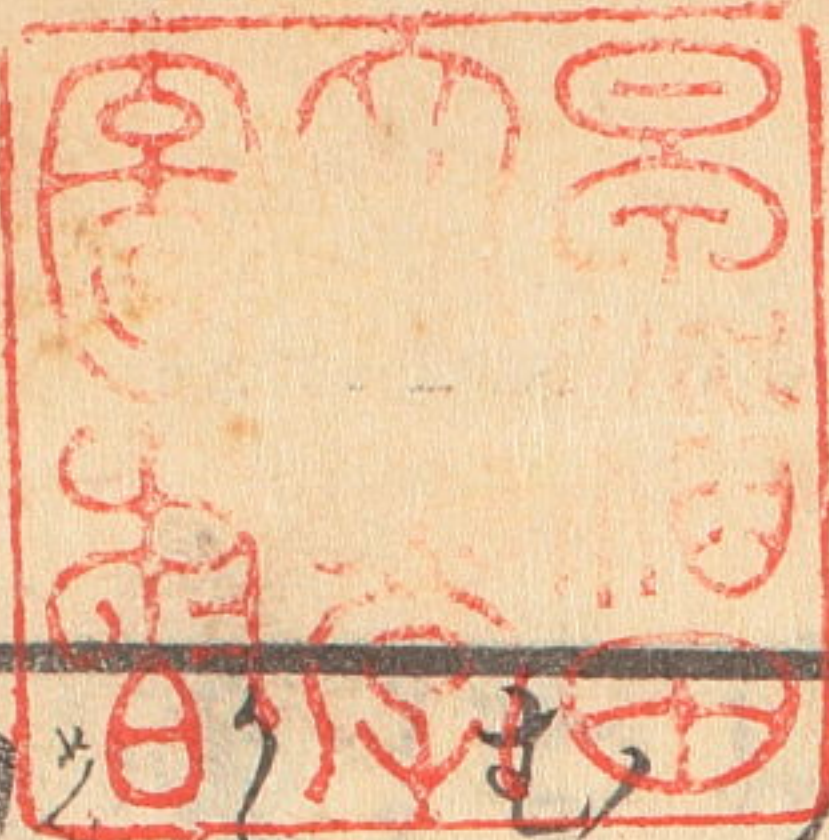
うたがはるし

全二冊

東都 向榮堂藏

明治三十四年四月七日

市島謙三氏寄贈



利月 539 卷

序

余が相識亦言答を老人あり志を
ついでいふは此一條を先づか
め然れども何ぞと云ふは
面負真のいへ我七年を未だ
とれは白の我算をさしは
はをふとて老翁を言答の程を

河原に字尾を誂ふ子屋ふちあり一目
成りて彼をさるるも不圖七冊子を付
此二三枚讀や言據我拍後を消し
奇妙の書り一紙も六つはうもの
一三も有り一貨てふされ高し多し
真不寫して手書とせぬも子取を
黙と居る所て前日寫ふに際たかぬ

とよふ書いしを五百とせぬも
何職くの中間取れと以ては
口の表へつても書ふ相貴所は口中
ぬりし道ありやと押かてられ弘法も
筆は禊つていふ所少くあり
様子あり書物なれは筆のりも
有し云換は去口乃禊あり

とせうはえらわれつゝかゝりし
悔り一紙直下及しと作者
賜りぬ

市中杜多

覺蓮房識

愛花道人書

自序

若い時乃氣強き已れと思ふ
た細工も老武者れか解し
ひな子乃及ん浮世裏の三疊子
遊了白紙の俳偕を樂し免
かゝも根か職人の文盲なけり

門かん 那な 河か 之の け 幾いく 々々 幾いく 々々 々々
 八はち 百ひゃく 廿にじゅう 八はち 満まん ぬ 登のぼ 一いち 輪りん 之の せ
 近きん 更ま の 虫むし 林りん 何なに 某ごと 之の 色いろ 何なに 一いち
 嘘うそ 作つく 手て 海うみ 次つぎ 身み 教しよ の 中なか 之の
 尻しつ 河か 之の 河か 交まじ 一いち 海うみ 之の 次つぎ
 新あらた 壺う 之の 様よう 子こ 輪りん 之の 已い 知ち 何なに 一いち 乃の
 二

元もと 之の 子こ 之の 人ひと と す 喜よろこ 此こ 日ひ 秋あき の 牧まき 長なが
 乃の 以も 之の 之の 海うみ の 香か 河か 焚たき 手て 幾いく 々々
 幾いく 々々 一いち 之の 全ぜん 之の 扇あふ 凡たゞ 一いち 水みづ 席せき の
 屈かみ 何なに の 巾きん 条じょう 湯ゆ も も 亦また 之の 一いち 之の 一いち
 作つく 撫な 之の 佛ぶつ 系けい の 子こ も 亦また 之の 一いち 之の 一いち
 他た 者もの の 幸さい 也や 志し 之の 一いち 之の 一いち

也はけおの事成そくわつけろ又

けの事ありあり

▲菜 さい さひんそで食ふ也ふさあどーそとと通じ

▲香物ハ かうのり ふゆふ故よかひくあどー

▲羹ふ膳 せんとん よあろぶ所ところの具ふよりて食類あじりの惣名そうめいなる

もれちり 平坪猪口 鱈

是の器具の考ふりふあ道みちをも食ふあろぶ故先考を

あふ鮮

▲開 ひら せくくの略りやくひらあどー

▲茗 ちやう つばむの略りやくつばあどー

有来り ありき 圓ゆる まる 文喜の ぶんぎ 坪と つら 地坪の ちへい 終る おわり 不あ ふあ 玉屋ん たまやん と

膳部ぜんぶのふわやまりあり

▲志を しを せくく食類あじりをさく置おく器具きぐの考かふ

ひかー六和園ろくわえんよ和わの棟春むねはるとりふ入いわり何なにととのふあ

才さい能のうわる者ものを土つち中ちゆうで挽物ひきもの器き作つくるより考かん付ぐて挽ひ春はる成なり

よふ用もちひさの原はら本もと成なりのつら山やま成なり挽物ひきものをさく

あせり大とましく小とましく或ハ浅く深くまぐの畧を撰
 出せり近郷の貴賤をまじりて調法して懐び目々整齊せり
 後ハゆびとれき清方ハまじりてまじりけるまじりて
 名わぶくと入との同ふなるまじりて考へて中けり其まじり
 先生和氣が宅へ輯著ゆまじりてまじりてまじりて
 人ふりて曰我がまじりて製一まる玉の畧まじりて
 あ一衆人名わびてこそ然るまじりてまじりて
 むとこ一更とむらひまじりて先生考へて箇中りのふまじり

解はるまじりてあまじりて是ハ天地自然の教をのりて
 軍死とまじりてあまじりて人を教へりつふと中けりまじり
 をとて大の教成八といふ故ハ大なる成八といふ成を
 こととてつふとまじりて是奇ありとて大をまじりて小と
 といひまじりて大成を撰あまじりて本をまじりて大成入
 て大をまじりて餘ハまじりてまじりてまじりて又小の
 具このまじりての文字成添てまじりてまじりて
 をまじりてあまじりてまじりて今まじりてまじりてまじりて

わり

又是よりめーあるを食ふべき罪を業んと挽
 かせりむらめーの土罪めくすみーのかり又五
 罪とりみのわら右の天竺佛在世のとき袂めて
 製ー五組又作りーそのちつともりのあま
 ち下よりたはたき獨かきされふ刃ひみ組の
 中へみえあつたうあつたの之更ハ四組中てとせ
 るはか編りり是ふゆ名を自人と例の先世く

同じまが先世まらうとまけあひ此あびり後くの
 うりもの張とまあー後めて後世ふ後ー用
 ゆるゆ右の具も足下の名張はぐさぬはあて
 のちれせふのちすの匠ーと和名の棟春と頭字
 ぶあて

▲わむ 今のく用ひ来るあぶー
 ▲猪は どのちのちとひあひんせりいひち
 さら養中うあおひちちあぶー

▲鱈たかハ 生魚なまな 生青物なまあおもの 鰯いわし 紙かみ かけ 刺身さしみ といふ

▲此こまふあまあますなすなはは〜

▲箸はし はは〜はは〜ととかけかけ〜ととすすゆゆ〜ゆゆ〜紙かみはは〜

▲豆まめのの皮かわををとりとり〜餅もち〜

▲餅もち ちち〜のの皮かわふふたたゆゆのの皮かわももああ〜

豆腐類とうふ変名へんめい

▲豆腐とうふのの製せいりりはは〜豊とよ后ご秀しゆ吉きち公こう朝あさ鮮せん法ほう陣じんののととたた製せい

糖とう下げ奉ほう行ぎやうふふ呂りよ部ぶ治ち部ぶ太たい坊ぼうののととりりよよ人ひとありあり後ご

法ほうかかいいちちんんののととたた豆腐とうふのの製せいりりはは〜

よよりり製せいりりはは〜日にっ本ぽんみみてて〜ととめめてて是こをを作つくりり給たまふふ

此こののととりりよよ豆腐とうふはは〜のの皮かわととりりよよ又また 志しふふととりりぬぬ

ああららももりりよよにに其その後ご所ところ方かたににてて製せいりりはは〜

ささららぬぬふふ紅こう葉えつ紙しはは〜由よし人ひとののおおみみくくかかららすすみみふふ

ととののりりとと皮かわ及およびび〜

▲八はち厘りん 豆腐とうふ 有あ行ぎやう脚きゃく奥おく列りやく南なん部ぶのの

八はちのの厘りんととりりよよ筋すぢはは〜ととりりよよ筋すぢををりりとと細こくく

あわぐさくあつきのゆて平につけぬ
^{うろ} 増くして^{びと}美味ありそのうち^ま宿よ^あり^あ酒食
のそふして^あ友人あ^あらぶ^あ製し^ああ^あ新ま^あひぬ
^あ名も^あ南^あ部^あ八の^あ庵^あを^あ食^あせ^あや^あ其^ああ

はち庵さうぬあぶー

野狐豆腐

都よとくわこは^あ回^あ舎^あより^あ易^あ白^あと^あり^ああ^あも^ああ^あけ

ま^あ狐^あお^あ吉^ああ^あ同^あふ^あその^あ細^あの^あ位^あ所^あの^あ完^あの^あい^あ
^あ生^ああ^あ野^あの^あさ^あう^あぬ^あ奴^あそ^ああ^あの^あ食^ああ^あと^あく^あら^あさ^ある
^あめ^あく^あ善^あ悪^あを^あ定^あむ^ある^あり^あなり^あそれ^あゆ^あん^あ生^あめ^あ
^あ食^あする^あを

やこそうぬあぶー

双^あ豆腐^あと^あ六^あの^あ時^あより^あう^あま^ああ^あが^あひ^あなり
けんちん豆腐

備前の圓刀^あ能^あ治^あお^あの^あさ^あう^あち^あふ^あ水^あ由^あ軒^あと

あふ降^{かり}けは六^むのよろこびお哥^{うたご}人^{ひと}へ餅^{もち}をたま
りけふおぬ^{うさ}一^{いち}是^{これ}ハおれ^{われ}ちんあふらとひ
よるま 餅^{もち}お哥^{うたご}ちんとよむ習^{なま}ひせり

▲せんがく

撰^つ津^つの國^{くに}四^よ天^{てん}王^{わう}寺^じの樂^{がく}人^{にん}あふらとら^ら家^け老^{らう}翁^う
わり樂^{がく}第^{だい}一^{いち}妙^{めう}をまらめおら^ら其^{その}門^{もん}人^{にん}神^{かみ}めく
あふら^ら空^{そら}内^{うち}おひらりあふら^らく^く第^{だい}一^{いち}妙^{めう}を
まらめ^め一^{いち}ど^ども還^{げん}城^{じやう}樂^{がく}ハ傳^{でん}受^{じゆ}の^のありとて

撰^つ津^つの國^{くに}一^{いち}は^はのむあふら^ら其^{その}日^ひ箇^かの老^{らう}翁^う門^{もん}人^{にん}乃^{なり}
毫^ごにま^まりあふら^らび^びま^ま門^{もん}人^{にん}あふら^ら男^{おとこ}ら^らあふら^らと
りてあ^あ一^{いち}其^{その}ら^ら山^{さん}海^{かい}のちん味^{あじ}おは^はく^く一^{いち}焼^やり
お老人^{らうじん}のら^らひ^ひま^まら^ら豆^{まめ}腐^ふを二^に寸^{すん}あ^あど^どづ^づお切^きり
にさ^さ一^{いち}焼^やて本^{ほん}のめ味^{あじ}おは^はつ^つけ^けお^お一^{いち}老^{らう}よ^よ酒^{しゆ}
食^{あじ}をま^まめ^めけ^けら^ら酒^{しゆ}作^{さく}ら^らま^まし^しく^くとよ^よと^とら^らて
ま^まら^らのあ^あま^まり還^{げん}城^{じやう}樂^{がく}の第^{だい}一^{いち}の傳^{でん}をま^まの門^{もん}人^{にん}お
免^{めん}一^{いち}ま^ま是^{これ}より^{より}一^{いち}と^とよ^よお救^{きう}護^ごて味^{あじ}おは^はつ^つま

一 伝代^よの傳樂^{たづねがく}とよひ習^{まな}ひけり予^よが禿^{かぶ}髻^げの
 ち後^ちまを傳樂^{たづねがく}とて^あくの所^{ところ}んごうゆもあつめ
 わるしうけつはしう國樂^{こくがく}とて^あ述^{たづね}けりけりけり
 せんがくあふし
 一 節^{しやう}の國樂^{こくがく}法^{はふ}原^{げん}とらふ^ま後^ち樂^{がく}あり此^こ千^{せん}の^とご
 ぬ^ぬこ^こと^とい^いふ^ふせ^せら^らわ^われ^れと^とも^も非^ひあ^ある^る

湯婆

出^で羽^との國^{こく}田^た河^か那^な湯^{たう}殿^{でん}山^{さん}を^を日^に本^{ぽん}の^の靈^{れい}山^{さん}ぬ^ぬり

糸^{いと}藉^{せき}の人^のあ^あく^くも^も登^{のぼ}る^る精^{せい}進^{しん}け^けり^りま^まあ^あく^く
 四^し季^きと^との^のふ^ふと^とう^う履^つる^る物^{もの}あ^あし^し中^{ちゆう}を^をま^まは^はし^し藤^{ふじ}
 浴^ゆ衣^いや^やあ^あて^ても^も料^{りやう}理^り州^{しゆう}の^のあ^あま^まり^りけ^ける^る中^{ちゆう}あ^あ
 金^{かね}糸^{いと}履^つと^とり^りの^の婦^ふ人^{にん}履^つむ^む女^{によ}豆^{まめ}次^じ引^ひ製^{せい}し^して^て
 さ^さま^まぐ^ぐふ^ふそ^そと^と健^{けん}よ^よて^ても^も揚^あち^ちど^どし^して^て向^{むか}は^はす^す
 せ^せう^うち^ちま^まご^ごよ^よ月^{つき}ひ^ひ食^たさ^させ^せけ^ける^るそ^その^の味^{あじ}よ^よひ^ひん
 あ^あく^くま^まう^うし^しく^くあ^あは^はる^るめ^めの^の其^{その}製^{せい}し^しか^かご^ごき^きん
 所^{ところ}ま^まて^てあ^ある^るひ^ひ角^{かく}よ^よつ^つと^と又^{また}袋^{ふくろ}の^のま^まま^まふ^ふし^して

都方ゆきの精進のいぢりみゆひたる元よ
了何とるもあはれゆのゆ湯敷山下の湯ぐ製
しちぢめけきび自然と

湯薬と謂あるべし

▲ふゆゆき大根

漆細之皮をすりのを塗作機といふより冬
寒気はよき并らうらうらりの物何あゆゆ一
向よかひきひと好し

ゆるともり戸棚のきぬふ作りし月へみ成吹
酒をふき大気ゆてわてめてゆかまらむ
物たり然るあわる僧の中はくすれ大根は塩成
いさよりく煮てその湯成むらへ吹ぬりのを
入く眞とまらむね右様入僧のをえのぬく
せしるむしとかがしゆきびし寒さのち
る大根の湯をえかまらぬさそゆでる大
根目くたまりなるふ捨るぬをわらむらむら

この粉をほろろと煮て一とめうらふまの糖を
味増あんど角とてめらめらその倍よる味を
あらあら大根あらべー

千六本大根

おろし子と煮まじり乳あき女子と煎世音茶よ
地味喜喜焼く大根を清浄よしと糸ほそく
お一心祈念しと是を倍とさげて汁よ替えて
食さきとめて乳汁ぬると中味とけら右千本

と煎世音へ供と六本ハ六地味喜へ供と奉つ家
その汁世間よ流りしとあめく願わくとを
汁ふあぬ

又大根を蘿蔔とりよ是をよまやふあめへせん
らふと調と此節わかちや

たくわん漬

大根成りの内より糠塩分加減して漬物
よく牛肉番ののめく大商人大職人たのせん

人成法よしの事食とよするなり

厚くを紙一葉抄くおよぐ塩のかく死のこゆて

高味なく教くハ食せよと徳用の酒の多

くめん漬ちまへ

澤庵禪師のつけちまへも又幸より幸く

たくじん漬ちまへ

雷ほ

浅丸丸漬丸塩よめて土用の照る日中一日干し

わらうらあくと巻を箱づまの形のちとーこれを

くらへが音かーはーく毒ふとたぐきするぬふ

かへんあまほーあまへ

もりに

摺列池田伊丹の酒同をめくはとあのごま

大根を酒粕のふーのぬけらへさしゆき

國へ法と出ーのさ死存の薪へ杉のせんとさー

かへ還包よしてゆきとそのはくさーさー大根を

昔も取^とり茶漬^{ちまじ}あどのそ人物^{ぶつ}は田^の酒^のの気^きめて
も高^{たか}味^{あじ}まりのそ人^{ひと}は^かき^てし

もりのあま^{あま}——

▲天^{てん}遠^{えん}羅^ら

魚^う類^{るい}は^わか^りて揚^あぐら^ら名^なとそ^とめ^めも矢^や
遠^{えん}羅^ら阿^あ希^しと万^ま葉^{えつ}の^り名^なとそ^とか^かん^んげ^んふ
書^かて^てう^うら^らの^のあ^あり^りは^はし^し揚^あの^の字^じを^をぬ^ぬき
て天^{てん}遠^{えん}羅^らと^とし^しま^まか^かき^きし^し人^{ひと}都^とて^てん^んあ^あら^らと^と熱^{ねつ}

名^なよ^よま^まり^りけ^けに^に天^{てん}と^とり^りの^の文^{ぶん}字^じを^をわ^わか^かの^のか^かあ^あて
わ^わと^とよ^よは^はせ^せし^しる^るわ^わが^がら^らは^はげ^げの^の略^{りやく}
てん^{てん}あ^あま^ま——

▲さ^さー^ーみ

鯉^こ鯛^{たい}手^て目^めま^まぐ^ぐ魚^うす^すと^と角^{かく}ざ^ざり^りて^て魚^うく^くま^まり
部^ぶみ^みを^を大^{だい}根^{こん}れ^れた^たら^らし^しる^るは^は毛^け然^{ぜん}さ^さら^らぬ^ぬと
り^りの^の其^{その}名^なの^のお^おと^とり^りは^は九^く別^{べつ}の^の海^{うみ}と^とあ^あら^らる^る蘇^そ大^{だい}
漢^{かん}わ^わり^りけ^けは^はあ^あら^らる^るあ^あら^らる^るあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^とあ^あら^らる^ると^と

廣野の山定ありのちを別を角より
さすゆい小縣のの名今由幾より其のちの
量よりよてましくうりかいをち一四方がかり
右の縣よちひ何異ちて由角より幾び
角といひあはせらるるゆゑに
さしあはるべし

虚南留別志卷之上終

虚南留別志卷之下

江戸木屑庵述

すし

海より鴨鳩とりよるよく異成をまひて岩の
同小隠と船のものは成ありてよるよる
くらよる味して自然ふゆふゆ

すしあはるべし

寛永のころは今のやど江戸町中の料理屋と

りのりものつひ山をちありとを日本橋より橋屋系
 橋より海やと謂ふも此二軒名をくを月
 橋屋より六臂を考ふる代かり袋屋めくも
 蛇考ふるが名おちり二軒ともお屋の妙成
 びよりそのゆり
 蛸の袋屋考
 蛇の袋屋考
 是をたこのころふあふびのあつ考このひあつ
 せりむかしのれあつるあつををわづ

加波原とせん海

壽永年中平家追討をして八志ま檀のうら
 孫倉將軍代官とて判官及備後出馬
 わりあふ源氏方のうちより殺さるる無傷とふ
 の平家へ喜切致さしあまの之は及のちと
 り陣をとるに海見致さへたに源家のつむの
 あつる殺さるるあつるあつと我さつと海見
 をあひり馬強かけと一時よま無傷とふら

さらし筋骨はねを^{すし}から^し時を^{とき}わげ^ら軍陣^{ぐんじん}を^をま^ます
 とま^とぐ^ぐま^まぬ^ぬ八^は号^{ごう}く^くれ^れの^のひ^ひた^たけ^けり^り先^まの^の兵^{へい}を^をか^かと^と免^{めん}
 兵^{へい}糧^{りやう}か^から^らぐ^ぐ野^のの^の隙^{ひま}所^{ところ}を^をみ^みつ^つけ^けて^て兵^{へい}を^をま^まさ^さら^ら
 せ^せ軍^{ぐん}兵^{へい}を^をど^どの^の大^{だい}將^{しょう}浦^{うら}殿^{でん}より^{より}始^はり^りけ^ける^る荒^あ海^{かい}の^の
 る^るを^をま^まに^に較^{かく}の^の兵^{へい}の^の三^{さん}派^ぱ山^{さん}の^の兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りち^ち軍^{ぐん}
 兵^{へい}より^{より}上^{かみ}へ^へこ^こま^まに^に攻^{こう}め^める^るは^はげ^げお^おま^まさ^さ上^{かみ}へ^へく^くや^やと^と相^あい^いま^まじ^じ
 上の^{かみ}御^ご意^いの^の較^{かく}を^を谷^やも^もま^まら^ら骨^{ほね}は^はね^ねま^まし^しけ^けれ^れば^ばそ^その^の如^{ごと}く
 ち^ちの^の兵^{へい}も^も骨^{ほね}を^をま^まさ^さり^りた^たま^まに^に持^もつ^つて^て湯^ゆが^がき^きけ^ける^るべ^べし

と押^おし^しせ^せふ^ふより^{より}ち^ちの^の兵^{へい}は^は上^{かみ}へ^へ攻^{こう}め^めり^り一^{いつ}體^{たい}の^の兵^{へい}を^をま^まさ^さら^ら
 會^あひ^ひけ^ける^る隙^{ひま}の^の隙^{ひま}の^の隙^{ひま}を^をみ^みつ^つけ^けて^て兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りた^たま^ま
 か^から^らも^も一^{いつ}時^{とき}の^の隙^{ひま}を^をみ^みつ^つけ^けて^て兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りた^たま^ま
 れ^れば^ばせ^せい^いち^ちの^の兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りた^たま^まに^に持^もつ^つて^て湯^ゆが^がき^きけ^ける^るべ^べし
 一^{いつ}の^の押^おし^しけ^けり^り
 は^はん^んの^の兵^{へい}も^も半^{はん}の^の兵^{へい}の^の隙^{ひま}を^をみ^みつ^つけ^けて^て兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りた^たま^ま
 ち^ちの^の兵^{へい}も^も半^{はん}の^の兵^{へい}の^の隙^{ひま}を^をみ^みつ^つけ^けて^て兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りた^たま^ま
 半^{はん}の^の兵^{へい}を^をま^まさ^さら^らり^りた^たま^まに^に持^もつ^つて^て湯^ゆが^がき^きけ^ける^るべ^べし

は見えしまふつまゝにこれあはるべし

▲志のんかん

吳中あつちゆうのせい山ざん 篠たけの向むかひよりより黄わうぎはくはくの肉にくふ
竹たけの子こをを入いれてて家いへ張は志しのんかんと習しゆふ

箭やまとの文ふみ字じを志しのんとよむひくそまはつつまんく
考かうふまうたまは寒えとそのゆな

志のんかんあはるべし

▲糸粉煮

唐たうより雄ゆう界かい帝ていのと糸いと只ただ織を漢わん織をとり者ものきらふり
錦にしきその外あの紋いわらの色と糸わり出いせし女にをま
そまより日に本にこれを傳つたふ九月十八日より彼か等ら
糸いとあらにままぐの物をけたらそあへ糸因いんふ
てゆらふ存ぞんもまぐの色いろと糸あはるべしふまり
糸いとあらる形まりとままぐ
糸いとくず糸いと略りやくくく
いとと考かふりやうはるべし

梅が枝でん枝

京の斤をとりふ何某ととり人少くの風のちち
よるまに病おのり食竟さうふ進まば妻ちまの
こまはうれぬ神佛より益原きせむをわけて新皇
けまばらふ神わらぬのまふあんと貞心にすり
庭の梅の枝より一斗の着はさづくるありいそぐ
せばとふふ食づき病早く手愈さうひちりくと
の北は少小朝早く記出梅のまご枝尋ねあは

そうぬあぐ一斗の着わり取のとり困れえまの
よるの去作難弟はあはふしと上酒をう酒
めてましく餐し食をすめよとわらに早そく
存のまごく仕まきめけまの目成あずしと枝
えちりしけまそまより此あはせしあれぬ食
ひ人よをほつはせし世の人よ高味まりととて
世間ふりて記まよりおとらんぬるゆま
梅が枝傳更ちまごべ

梅の多ぶ婦人へはくえ習ふなり

▲志のぼく

周の御代は鬼神疾ふにその言めさる七寶
の具をのりてすとを神お供するものあらはく
波張のつと揚その外青物肉種とありその
祭祀すことより存の供物をさげ皆らちとふ
獨り入のさるは焚てくらふとする也をゆふ
七宝のうらふて供するゆ

志のぼくあり

象目の中ありのぼくあり

焚てくらふあり此のありけ

▲洗馬煮

木曾の道は洗馬宿とりよ所ありむ山中の
あり海へ遠く生莫まれくあり甚故お塩
魚かひ不難のま何ふさる塩煮はさる湯
ゆてゆをあらす塩煮はさるてそれより松葉煮

葛のちり平のちり平はく

ねづ平はく

かくや香の物

まをてがくは物をまをてまをてまをてまをてまをて

る香の物も古くありて味のわくちるを

くくとて酒をうけまをてまをてまをてまをて

まをてまをてまをてまをて

かくやまをて

又中村かくやといふ女形の役無かりて是ハ茶紙
よく一先祖指述ぬ茶をかせ一と死はかく
をまてめてまをて一なるまをてまをてまをて
死まぐに香々の名とすとむか一の人の終りま
つらあはや

▲菓子考 菓子ありまをての果物紙くま一と
滑あうたう梅枕の實梨子枇杷かどふ
あよつとはな

餅何處の中よ色む成わんとしよ初より之ぞ
しよと乾坤の如きさあや圍わんハサミカ
くさきありゆふ

わんちをいへ

今坂餅

今川何處とつ賢人わつて子身よ法ゆへ
して曰知かくんしもの仁義孔智信の
まのりかり初の中酒ハわさおありと今川社の

教へ一とくまうしけれバ其かわまこの門
身中まをこま成よく法しそかりふ由酒ハ飲
ざりけまある門人よりみきの阿んのしよ
餅を執トける先生とまのんさやちる餅あり
とゆのせらまけれバ則又色ハ仁義孔智信ま
青黄赤白黒と先生は福く修せらゆ
はま中とわん昔中あげりまハまのんさ
せのり中せり此み色の餅ゆづしとま

く流行あけらるる賞かこのさかり場ゆてもさる
つゝ髪一ゆきあひたる今盛ふと暑一
今さら餒かきり

今川権とていふもゆらり此あぐひかきり

紅毛ゆていふゆらりと二人の足手わりけり

ゆ一此のども申賸きく二人中ららせ菓子

家世あひわりのひつたむるゆきのとていふゆ

賣先ともゆらり賞かきり一せんともゆらりゆ

つとてゆとち糖あぐら砂糖その和由同食と備
てあそゆらり一と申見らあすふかると申いある
みらるとゆらりゆとせんと時の人よんて見ん
かすといふ 申然かるといふ
とよび菓子の名とちあもたら

▲ようかん

何もの國をゆく時ゆらりゆ心なけり一ゆらりのお
ゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらりゆらり

江戸に在りてはけらるる者教とて其のうへに
各修短慮のくみあはく為れどもむ細くそい
へりゆ折らるる系約よりわる典彙の頭とてこれ
けらる用校のものを早く一月通を極む五人の
短慮由に痛もゆてわらまやと句ひらば
整師の修より早く痛忘のあすゆこめん
あるとあは早く一月全校ふも相あはる一と
けらる用校のものを早く一月通を極む五人の

けらる用校のものを早く一月通を極む五人の
かんぐりてはけらるる者教とて其のうへに
各修短慮のくみあはく為れどもむ細くそい
へりゆ折らるる系約よりわる典彙の頭とてこれ
けらる用校のものを早く一月通を極む五人の
短慮由に痛もゆてわらまやと句ひらば
整師の修より早く痛忘のあすゆこめん
あるとあは早く一月全校ふも相あはる一と
けらる用校のものを早く一月通を極む五人の

此^{あはれ}製^{せい}養^{よう}き^きふ^ふえん^{えん}小^こ児^じその^{その}あ^ある^る疝^{えん}の^の病^{びょう}ひ^ひの^のの^の專^{せん}と
用^{もち}の^のゆ^ゆの^のあ^あり^りぬ^ぬ疝^{えん}は^は養^{よう}ふ^ふの^の專^{せん}と
養^{よう}疝^{えん}あ^あべ^べ—

ひ^ひと^との^の疝^{えん}の^のの^のと^と何^{なん}の^のう^う疝^{えん}め^めう^う—^さと^と疝^{えん}は
疝^{えん}の^のゆ^ゆの^のあ^あり^りぬ^ぬ疝^{えん}は^は養^{よう}ふ^ふの^の專^{せん}と

▲^ら落^{らく}厚^{こう}

や^やん^んお^おと^とれ^れさ^さの^の方^{ほう}年^{ねん}久^く—^くは^は奉^{ほう}と^と世^{せい}物^{ぶつ}老^{らう}人^{じん}
の^のり^り公^{こう}事^じと^と汝^には^はい^いら^ら家^かの^のわ^わの^の久^く—^く何^{なん}ぞ^ぞの^のを^を

も^もち^ちの^のと^とや^やと^と修^{しゆ}し^しけ^けれ^れば^ば箇^{くわん}の^の爺^{ぢやう}が^が曰^いく^く誠^{まこと}み
年^{ねん}久^く—^くは^は厚^{こう}思^しよ^よあ^あら^らか^から^らま^まて^て何^{なん}の^の後^ごう^うと^と
さ^さは^はあ^あら^らが^がは^は樂^{らく}よ^よ福^{ふく}が^がひ^ひと^とと^と朝^{あさ}ゆ^ゆみ^み
や^やん^んの^の疝^{えん}の^のあ^あら^らか^から^らま^まて^て何^{なん}の^の後^ごう^うと^と
寺^{てら}の^のり^りは^はあ^あら^らか^から^らま^まて^て何^{なん}の^の後^ごう^うと^と
あ^あら^らか^から^らま^まて^て何^{なん}の^の後^ごう^うと^と
う^うは^はあ^あら^らか^から^らま^まて^て何^{なん}の^の後^ごう^うと^と
あ^あら^らか^から^らま^まて^て何^{なん}の^の後^ごう^うと^と

右者^{ミナト}をすびて世^よ道^{ミチ}明^あくとありをりひ
 習^なしけりおのほりいふ所^{ところ}をくらゐの舞^まがむ
 はふわう〜〜業^{わざ}梅^{うめ}の枝^{えだ}の形^{かたち}成^なれよ〜是^{これ}
 よし〜〜ぬきおの千^ち飯^{いひ}成^{なり}ひご〜〜にま〜〜
 先^ま遣^{えん}神^{かみ}の備^まへ先^まの目^め形^{かたち}由^{よし}虧^けトけり〜
 爺^ぢが細^こ〜〜妙^{まう}ありとゆめふより申^{まを}んごる死^し
 雲^{くも}の上^{うへ}〜方^{かた}もわげ〜まけに儲^{たくわ}めづの葉^は子^こ
 ちり〜〜とゆめふ〜及びけあ〜る〜何^{なに}とゆ

なく只^{ただ}樂^{がく}を秘^ひびひ〜〜らう箇^{くわ}のふよほら
 へ〜〜の餘^{あま}り〜整^{ととの}〜只^{ただ}朝^{あさ}暮^{ゆふ}樂^{がく}成^{なり}
 礎^{いし}ふより心^{こころ}ひけり〜ふ
 樂^{がく}願^{ねん}と〜あ〜
 花^{はな}ほ〜あ
 ちり〜白^{しろ}拍^{ひつ}ふふ名^な傳^{でん}や花^{はな}ほ〜とひ〜あ
 わ〜何^{なに}も〜あ〜舞^まのふその中^{なか}に
 るよ妙^{まう}成^{なり}て天^{てん}下^かた〜形^{かたち}〜〜被^かを〜せ

長巻

二七

一の抄をくちりけり六浴衣ののちう庭そのか
 何れも彼が定紋を作ら出し濡かし天下れ
 院初めのと六あまけしその紋如
 かくのおと死紋より世うけりかよりて平葉
 りよのこまの紋如今よ残まりかほりの文ま残
 花とよみかしく
 花ぼるちるぐー
 せんをん

天正年中のち後場よ納屋の文四郎とりよ
 人わま茶の湯よ名成ゆて中おとちるこ
 まをちるせりま茶の湯目わりけりまの葉に
 よろく予之利久とま母うトけり門人教あわり
 その中よ幸無湯とりよ人これち茶の湯成ゆし
 殊よまきぬぐののふ文独わのち葉まあんど紙
 髪一けりよそのは六大ひよ天下乳ま葉ま屋
 ながりよもちるぐに取そのあふゆる紙かきけりよ

此人小妻よ砂糖をわらせ焼かす種よくさま
 一のちひけりよつと貴人のりそびとさり
 ちの老ゆ千足利久よすつけ千の二宮せり
 則葉子の名ゆ千の幸なしくと種よく
 けりしはーの幸のまをさぶさて
 せんをさくとしよあまー
 此れどよ昔よかへる香のいとに種よく
 此れどよ昔よかへる香のいとに種よく
 此れどよ昔よかへる香のいとに種よく
 此れどよ昔よかへる香のいとに種よく

▲わらぬ糖

今いむかしのりありける二色等
 有平とりの力士
 わらぬ糖の多かりぬて古今強く大園よす
 通一隠居して奉寄かぶよありけり
 酒飲ちのまぐわき死物のと食して朝夕
 けりしは肥赤陽より紅毛中死を細め
 のけ居よ食客とちりけり大園元の朝夕砂

糖とうのこは食のをとりてその砂糖さとうを糺して食す
 あひ一は美味ちりと中に入りづまいて食ふと
 ちけは先さまらうのあくを換わげの獨りの獨り
 つりあくとまま一あいけの是れまうえく是れは
 紅く又どの若々つけ葉まらる一人くあまを煮る
 一けまま有平糖とうくとよびけまらる一く
 是れもうをわらとよびかく
 あまらる糖とうちり一く

二色の若々つけも名の縁うと一寄ふちり糖
 ちがりらを大こ一まげ又むすび換はえ乃
 ちあめふあまらうと一糖とうままらうあまらうと
 りふち有平の名よ張一ぬ
 七五三

△ 飴

春の雨の膏雨とりあい糖とうままらうの雨の白雨
 としてあまらたまの如く一秋雨の万葉よ其を付
 冬の雨の氷でたん切の如く一けづまと一あまらう

むいゆあ

何れにぬの名よえげくちるべし

▲知こし

奈中良の國の朝さくよりあき野の國のあらし

あく小兒としども朝霧成させむ継後の

あり新地さかぬるに茶をりりく船のあふ

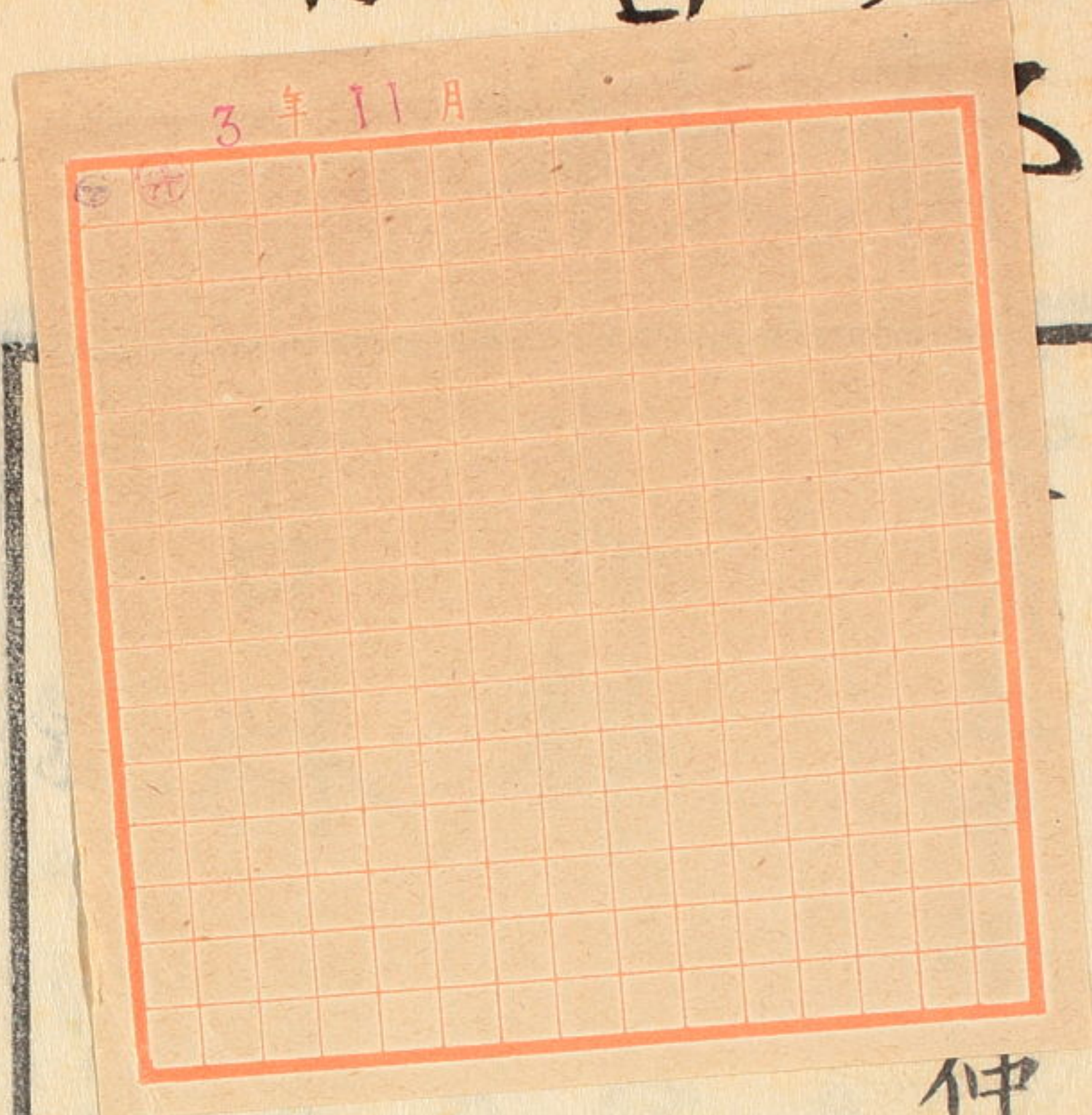
物よ何えぬんよあきよくと乾しとけり

あそくし守けりしちるが常あちりて移る時

あそくし茶くまんとし朝霧のしるをそれぬ世

虚南留別志卷之下 終

東書天保



虛南留別志後篇

近刻

仲復發行

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

兩國吉川町

山田佐助

馬食町三丁目

宮屋源兵衛



都林

虛南留別志後篇

近刻

天保五甲午仲夏發行

小傳馬町三丁目

東都

兩國吉川町

丁子屋平兵衛

山田佐助

馬食町三丁目

宮屋源兵衛

書林



